

# 「近代日本の仏教」への助走 —『大法輪』奇聞—

金沢 篤



## はじめに：『大法輪』の方へ

今夏も StayHome だった。すっかり出歩くことから遠ざかっている。数少ない楽しみは気の置けない友人たちとのちょっとしたメールのやり取りかもしれない。じっとしていても汗ばむような夏も盛りのある暑い日、とても真面目な仏教研究者である友人のメールに、「ご存知だったかも知れませんが、つい最近になって『大法輪』が休刊になったことを知りました（もうすでに数ヶ月経っているようです）」とあった。むろんわたしは初耳だったが、自分が仏教系の有名な月刊誌のその『大法輪』の刊行を毎月心待ちにしているような人間ではなかったから、そうかと聞き流す他なかった。確か、大法輪は、仏教を勉強しようという奇特な学生に対して「奨学金」を出していたような記憶があった<sup>1</sup>。親しくしていた同僚から「今日はこれから大法輪」というセリフを一度ならず聞いたことがあった。奨学生の選考に関わる会議があると言う意味だ。

世間知らずのわたしなどは「大法輪閣」というその出版社がどこにあるかも意識したことはなかったほどだが、だからと言って、これまで無

<sup>1</sup> ネット上で確認しただけだが、『大法輪』誌は、2020年7月号をもって休刊したようである。おそらく宗派を越えた仏教系の営利月刊雑誌で最も歴史のあるものと考えられる。残念至極である。

<sup>2</sup> それが「大法輪石原育英会」の奨学金であることを思い出した。

縁だったわけでもない。思い出したように書くエッセイなどで、『大法輪』誌掲載の記事や論文を参照する必要が時にはあったからだ。最近だと、使う使わないは別として、良寛を特集している号などにはお世話になった。そんなことで、新刊の雑誌を購入したりすることはなかったのだが、時々顔を出す古書市などで、「おーっ」と言うような特別の記念号に遭遇したりすると買っておこうかと購入するくらいだろうか。そんなものでも、まとめてみると結構な数になるはずだが、通常はどこかに紛れてしまっている。すぐに取り出せたのは、創刊号(昭和9年)と第七卷第九号(昭和15年)の二冊だけ<sup>3</sup>。昔の『大法輪』の表紙畫がいい。創刊号の方は、護国鎮護の呪神『劍之護法飛行之圖』、「国寶信貴山縁起加持卷の一部」とか、劍の護法が法輪を転じながら飛行する図、後者は富田溪仙筆『大自在天』。題字は、前者が赤字の「大法輪」と黒字の「創刊號」、後者は黒字の「大法輪」と赤字の「九月號」。創刊號の背表紙に誌名の「大法輪」と「創刊號」と「定價 金五拾錢」が一行に印刷されているということは、値段の廉さでもアピールしたかったののだろうか。六年後の刊行のもう一方には、そういうことはないが、裏表紙の左下には、やはり「定價 金五十錢」とかなり大きく印刷されているから、今の感覚にすると廉いのだろうか、高いのだろうか<sup>4</sup>。

創刊號はともかくとして、さて後者はなんで買ったのだろうか、と大きな法輪の図の折り込みを観音開きして目次を見てみると、おそらく、渡邊照宏氏の「佛教論理學 因明の話」という記事に引かれたのかもしれない。編輯後記には「「因明」とはそも如何なるものか。因明專攻の新進

<sup>3</sup> 「いま、良寛に学ぶ」との特集号『大法輪』誌第58卷(平成三年)第11号をやっと参照出来た。この号には、やはり色々な人が書いておられるが、元駒沢大学教授の飯田利行氏の「禪の修行に励む良寛」(114頁)の最初の頁と、聖心女子大学名誉教授の目崎徳衛氏の「草庵の自然」(148頁)の第2頁目の「薪を担ひて 翠岑を下る／翠岑 路 平らかならず／時に息ふ 長松の下／静かに聞く 春禽の声」の詩のところ付箋が貼ったままである。巻頭を飾るのは東洋大学学長の菅沼晃氏の「非暴力の心を再び(上) — インドの宗教対立をめぐって —」(22頁)。その中に、「一九九〇年版の『インド年鑑』(インド政府刊行)」による「宗教人口の統計(一九八一年調査)」が紹介されている(その調査では仏教徒の比率は0.7%)。学生の頃にお世話になった筑波大学助教授の竹村牧男氏の「道元禪に生きる良寛」(128頁)を読もうとしてその特集号を求めたのかも知れない。

<sup>4</sup> 同じ頃に刊行された新潮文庫などが「四十錢」やそこらの価格がついているのが、参考になるか。

學徒渡邊照宏師にその解説をお願いした。」(286頁)とある。肩書きは、智山専門學校助教。昭和15年の9月號ということは、1940年。渡邊照宏氏の岩波新書本は『仏教』(1956年)から『仏教 第二版』(1974年)に至るまでの全六冊(共著を含めると全七冊<sup>5)</sup>)はすべて持っているが、その奥付の著者紹介などを見ると、1907年のお生まれとあり、1930年にイン哲を卒業しての若干33歳ということである。因みに『仏教 第二版』は、ある時期、毎年担当する「仏教と人間」という多人数の授業の教科書として使っていたから、とにかく未使用美麗本がそれこそ手許に何冊もあるほどだ。

### 内田百閒と『大法輪』

毎度のことだが、へんな書き出しになって恐縮だが、今夏は、ひょんなことで、作家の内田百閒のことで(=内田百閒を廻る書物涉猟という旅に)忙殺されたということが言いたかったのである。必要上、百閒の書いたものをあれこれ集中的に読むことになったのだが、たまたま目にしたものの中に「坊主」と題された随筆があってそれを読んだのである。嘘みtainな話だが、昭和24年6月に湖山社より刊行された『百鬼園夜話』に収録されたものによると、次のようにある。

「坊主だの坊さんだのと何の氣もなしに云つてゐるけれど、いつぞや「大法輪」と云ふ坊さん達が出してゐる雑誌に寄稿を頼まれた事がある。夏の暑い盛りでも神主は汗をかくけれど坊主は汗をかかない<sup>6)</sup>と云ふ様な事を書いた。その雑誌におもねつたつもりはないが、自分の思ふ所を述べて坊主の肩を持つたのである。ところが雑誌が出来て手許に届いたのを開けて見ると、「坊主の汗」と云ふ文題が「坊さんの汗」となほしてあつた。編輯の方で坊主と呼び捨てるとは怪しからんと云ふ譯だつたのだらうと思ふ。誠に恐れ入つた次第で、さう云ふ浮かばれないお坊さん達<sup>7)</sup>は夏の

<sup>5)</sup> 『仏教』(1956年)、『日本の仏教』(1958年)、『死後の世界』(1959年)、『外国語の学び方』(1962年)、『お経の話』(1967年)、『私の読書法』(共著1969年)、『仏教 第二版』(1974年)。

<sup>6)</sup> 「神主は汗をかくけれど坊主は汗をかかない」ということ kara めて言うと、インドでは、「汗をかかない(a-sveda)」ことは、「神の特徴(deva-liṅga)」の一つに数えられる。

<sup>7)</sup> この百閒が言う「お坊さん達」とは、通常の意味での「お坊さん達」のことではなく、仏教系の雑誌『大法輪』を出している[と百閒が考へている]「お坊さん達」のこと。

法事にきつと汗をかくだらう。」(内田百閒 [1972.06] 435-436 頁)

なんと『大法輪』に縁のある夏だ、ということで、取りあえず内田百閒の『大法輪』誌に只一度だけ書いた「坊主の汗」ならぬ「坊さんの汗」を読んでみようと考えたのである。だが、その随筆を収録した『随筆新雨』を収録している内田百閒 [1971.12] の「解題」にも、旺文社文庫版の『随筆新雨』、内田百閒 [1982.01] の巻末「『随筆新雨』雑記」にも、初出は『大法輪』であることは記しているものの、その年月号については？が付されていたりするだけで？である<sup>8</sup>。書き手はどちらも平山三郎氏。結局、『大法輪』という雑誌はある意味マイナーなもので、考えられないことだが、簡単には参照できず、確認のための手間暇をスキップしたということなのだろう。だが有難いことに、われらが駒澤大学図書館には、当然ながら『大法輪』は若干の欠号はあるものの、バックナンバーを所蔵していて確認できる。第三卷第十一號(昭和11年)のようである。そこに内田百閒は、「百鬼園漫筆」と称して、「一、坊さんの汗」「二、心経」「三、大般若」の三題からなるものを確かに寄稿しているのである。戦後刊行された『百鬼園夜話』に収録された「坊主」で言及されている通り、百閒自身は「坊主の汗」と題していたものが、昭和11年11月に刊行された『大法輪』では、まさしく文題が「坊さんの汗」となっているのである。それが昭和12年10月刊の単行本『随筆新雨』に収録されたときには、「百鬼園漫筆」という論題は捨てられ、他の二題「心経」「大般若」に先立つ形で、元の通りに文題が訂正されて「坊主の汗」になったのである。百閒という作家は、そうしたささいなことをネタにして次から次へと文章を書いて、希代の名文家として知られるようになった人である。また、晩年になって、芸術院のメンバーに推挙されたにも拘わらず「イヤダカラ、イヤダ」と言ってそれを辞退したことで有名な作家である。東大から

---

出版社の「大法輪閣」のことは知らないが、「国際情報社」の子会社か？ この雑誌の刊行のために造り出された新組織、部門が「大法輪閣」か。仏教系の雑誌だからと言って、お坊さん達が、必ずしも雑誌を出しているわけではないと考えた。だが、ウィキペディアで調べたところ、『大法輪』誌の発行者(大法輪閣の責任者)の石原俊明氏が日置黙仙禪師に師事したこともある曹洞宗の僧侶であることを知った。

<sup>8</sup> 「新輯 内田百閒全集」と謳っているだけに、内田 [198706] の解題には、「坊主の汗・心経・大般若(百鬼園漫筆) / 『大法輪』昭和十二年十一月」(445頁)とある。だが、初出の際には「坊さんの汗」という論題であったこと、さらにそれが「坊主の汗」に変わった事情などには一切触れていない。

文学博士号を贈与したいと言われたがやはり固辞した近代日本の最大の文豪の一人夏目漱石の栄光の弟子たちの一人でもある。その百間は、仏教について必ずしも多くを語ってはいないが、ある意味、『大法輪』誌のおかげで、百間の貴重な仏教観の一端をわれわれは窺うことが出来るということである。昭和9年に創刊された『大法輪』誌の第三卷第十一號に百間は「坊主の汗」「心經」「大般若」という三つの文章を「百鬼園漫筆」との論題の下で書いた。

昭和11年の1月1日から書き始められた百間のいわゆる「戦前・戦中日記」、内田 [2019.05] の上巻に以下のようにあるのが、今の場合、参考になるだろうか。

「九月十九日 土／ 午過、ひるね。午後、至文堂の原稿始む。夕、大法輪の編輯者來。夜、全輯百間随筆の表紙及び扉の字を書いた。」(54-55頁)  
 どうやら、持病のようなものを持つ百間はこの時期かなり体調を崩していたようである。

「八月二十九日 土／ 非常にあつし。無為。午後、佐藤春夫氏の許より平井來る。夜、佐藤春夫氏を訪ふ。

八月三十日 日／ 昨日にもましてあつし。到頭夜十時頃發作を起こした。いつぞやの三十六時間半、又その次の年の二十六時間の記憶あり。あまり暑かつた後なので氣になつた。なほらす。」(50頁)

「九月七日 月／ 又あつくて無為。夕刻、動悸三時半より一時間十分續く。身體綿の如し。／ 一睡したら又睡眠中に動悸起る。十一時半也。それより夜中二時十五分迄二時間四十五分續いた。」(52頁)

「九月十二日 土／ 終日、静養。昭和九年五月六日に書いた遺言書を改めて午後中かかつて新しく遺言書を書いた。朝六時半床中にて動悸起りびつくりしたが、すぐになほつた。・・・<略>・・・」(53頁)

こうした状況の中で、百間は『大法輪』誌への寄稿依頼を受けたようである。次に『大法輪』の名前が出るのは、以下の記述である。

「九月二十五日 金／ 午前から兩日來書きかけてゐる大法輪の原稿を續けたが捗らず。午過、一寸ひるね。夕食前、動悸騒ぎ以來初めて行水を使ふ。

九月二十六日 土／ 大法輪の續稿。／

九月二十七日 日／ 大法輪續稿。午後、十六枚にて漸く終る。「百鬼園漫筆」三題。／ 午後、唐助來。待たしておく。原稿すんでからその後大法輪山下原稿を取りに來た。待たせて讀み返し終る。」(55-56頁)

(6) 「近代日本の仏教」への助走—『大法輪』奇聞— (金沢)

「九月二十九日 火／ 朝、大法輪稿料持つて來た。…<略>…」(56頁)  
「十月二十九日 木／ ひる前、唐助、村山、大法輪記者來。…<略>…」  
(62頁)

これ以降、日記には『大法輪』の名前は出ないので、この昭和11年10月29日に問題の「百鬼園漫筆」三題の掲載された『大法輪』第三卷第十一號(昭和11年11月1日発行)が、執筆者の百間の手許に届けられたのであろう。「坊さんの汗」との論題の無断変更に対して持参した?大法輪記者との間でどのような遣り取りが交わされたのかは不明、日記にも愚痴や不平不満の類いは一切見られないのである。

百間の問題の「百鬼園漫筆」の「一、坊さんの汗」に続く「二、心經」の最後は、以下のように結ばれている。

「それは今から四十年も昔の事である。つい先月寄贈を受けた『大法輪』を何の氣もなしに開けて見たら、般若心經の講話が載つてゐたので、冒頭に掲げられたお經の文句を讀んで昔をなつかしく思ひ、又もう十何年前になくなつた祖母のお經を讀む聲をありありと思ひ出した。」(61-62頁)

百間が「先月寄贈を受けた『大法輪』」とは、百間が寄稿を依頼された際か、それに先だつて寄贈を受けていた頃に刊行された『大法輪』第三卷第九號(昭和11年9月1日発行)であろうとわたしは想像している。その寄贈を受けた「先月」とはむろん8月末のことで、第九號の出来たてのほやほやだったと想像される。日記に最初に『大法輪』の名前が出るのは、先の引用でも明らかな通り、9月19日である。大法輪閣の編集部内部では、内田百間への原稿依頼が決まっていた、それに先だつて、見本となるような本誌第九號を寄贈本として送付してあったのではないか。

百間の「百鬼園漫筆」の掲載された『大法輪』第三卷第十一號の「編輯後期」には、次のようにある。

「◇本誌の隨筆欄は、その名筆に配するに典雅なる挿繪を以てし、絶体他誌の追隨を許さざる異彩を放つてゐるが、本號も亦、内田百間<sup>9</sup>、吉植庄亮、

<sup>9</sup> 現代においては「内田百間」の表記で知られている内田百間であるが、『大法輪』誌に寄稿した戦前には「内田百間」との表記が用いられていた。その筆名表記の推移に関しては、わたしも別に長い論放を書いた。『駒澤大学仏教学部研究紀要』第80号(2022.3予定)を参照されたい。



結城哀草果の三名家を迎へて清澄の氣、全誌面に溢れてゐる。百鬼園隨筆を以て知らるる内田百閒氏は當代隨一の名隨筆家、土の歌人吉植庄亮氏が農村を愛する切々の言は、百千のお座なりな理想論に勝ること幾倍。」(448頁)

そういう「當代隨一の名隨筆家」の内田百閒の隨筆の「文題」を著者との相談なしに勝手に変更したのである。自ら「鬼」と名乗ることのある百閒のその際の驚嘆と憤りのほどは察してあまりある。後に出版することになる「獨り言」の速記の文章化と言うべき『百鬼園夜話』の先に紹介した「坊主」の最後の捨て台詞?も当然と肯われるのである。

さて、掲載誌が仏教の専門誌の『大法輪』ということで、仏教がらみの隨筆「百鬼園漫筆」三題のうちの二番目が「心經」と題されていた。仏教関係者には、当然のように、これは『般若心經』についての隨筆であると理解されるが、その文題を着想するにあたっては、見本として大法輪閣から寄贈を受けた一冊の『大法輪』誌にあった「般若心經の講話」を読んだことがきっかけとなったと百閒はその隨筆の末尾で記しているのである。わたしは、その百閒の記述を目にして、それは『大法輪』第三卷第九號に相違ないと考えている。百閒の当の「心經」を読めばわかるが、百閒は、子供の頃の、自身の宗教事情と『般若心經』にまつわる自身の祖母の思い出を懐かしそうに語っているのである。百閒は病気がちと言ひ得る子供だったようで、病床で介抱してくれる祖母が「郷里は備前岡山」の新興宗教である黒住教の祈祷を案配したり、『般若心經』を読み上げてくれたことを懐かしそうに記しているのである。

「そんな事<sup>10</sup>は有り難く思はなかつたが、祖母がいつまでも足や腰や背中をさすつてくれながら、般若心經を繰り返し唱へてゐるのを聞くのはいい氣持であつた。さうすると私はその聲を聞きながらうつらうつら眠るのであつた。暫くして又目がさめると、祖母は矢つ張りおんなじ聲で『むむ妙藥むむ明神』と云つてゐる。子供の時の判斷で、私はそう云つてゐるのであらうと思つた。そのすぐ先には『般若波羅蜜多、腰剥け毛剥け』と云ふところもある。氣分の軽い時には祖母のお經に寝ながら口のうちでついて行く様な氣持になつたりした。それでいつの間にか、うろ覺えに、私もそのお經を覺えた様である。」(61頁)

<sup>10</sup> 黒住教がらみの御祈祷の類いを指すらしい。

わたしが、百間のその「二、心經」のきっかけを与えた寄贈された『大法輪』誌を、第三卷第九號(昭和11年9月1日発行)と考えたのは、その號には、大洞良雲<sup>11</sup>の「般若心經講話 第七講」が掲載されていて、その冒頭には

「【本文】 無無明。亦無無明盡。・・・<中略>・・・依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。・・・<略>」(21頁)

というご存じ玄奘訳『般若心經』の一節が掲げられていたのを目にしたからである。百間の手にかかる『般若心經』も形無しである。そうか、百間は、『般若心經』が日常的に唱えられるような環境で子供時代を送ったのである。「坊主」という『百鬼園夜話』所収の文には、

「僕が教へた学生の一人に、格のいい寺の住持になつてゐるのがある。私の家は天台宗だが、その坊さんは禪宗である。坊主と雖も頭を分けてはゐないが、正直に丸く剃つてゐる譯でもない。」(内田 [1972.06] 435頁下)とある。今こそ『般若心經』を暗唱できるほどになっているが、わたしは浄土真宗の一檀家に過ぎない家庭に育ったので、子供の頃の思い出には残念ながら『般若心經』は全然と言ってよいほど出てこないのである。三人の僧侶の姿は今もはっきりと記憶している。一人は、檀那寺のご住職、一人は家の近くの子供たちの恰好の遊び場になった光明寺のご住職、一人はやはり家の近くにある小さな尼寺<sup>12</sup>の尼僧(われわれは庵主さんと呼んでいた)、それぞれ、浄土真宗浄興寺派、浄土真宗大谷派、曹洞宗のお坊さんで月に一回は家にやってきて、仏間に上がり、仏壇の前に坐り、お経をあげると帰っていった。時々、鉢合わせすることがあったと思うが、当然のように、互いにやあやあとにこやかに挨拶を交わしていたように記憶する。いずれも、常に僧衣をきちんと纏い、頭も常にきれいにそり

<sup>11</sup> 大洞良雲については知るところはほとんどないが、大法輪閣より刊行された氏の『般若心經講話』、『修証義講話』を見ると、道元禪師の引用・言及が頻繁であることよりすると、やはり曹洞宗の僧侶であるようだ。

<sup>12</sup> 曹洞宗の僧籍を持つ同僚に、子供の頃に経験したその尼寺の年中行事を、「今日は嬉しいだんごもらい～」と歌まで歌って愉しみにしていたと話をしたことがある。それは、曹洞宗などで行われる2月の涅槃会の「団子まき」に相当するようだ。子供の頃のわたしには、宗派に対する意識などはなかったと見える。その日に先だって、尼寺からは寺男?のような者が各家庭から米を徴収していったような記憶がある。火鉢に網で炙って食べたその団子はカラフルで、色々な形をしていてとにかく童夢に溢れたものだった。



上げて坊主頭であった。が、どの御坊の口からも『般若心経』は聞かれなかった。曹洞宗の僧侶が阿弥陀仏を御本尊とする仏壇の前でお経を上げていたのだと今改めて考えると、何か不思議な気がするのである。

山本一生氏の今年度の大作は、山本 [2021.06<sup>13</sup>] で、この内田百間氏の『大法輪』の随筆がらみで、改めて熟読したのが、その「第十九章 二・二六事件から「相剋記」へ」の章（349-365頁）である。その冒頭は「百間日記始まる」との見出しと共に「昭和十一年（一九三六）から、百間の日記が始まる。」（349頁）で、始まっている。昭和11年とは百間が問題の「百鬼園漫筆」三題を『大法輪』誌に依頼されて寄稿した年である。山本氏の章題からもわかる通り、昭和11年2月26日は、有名な「二・二六事件」と結び附いている。内田 [2019.05] には、

「二月二十六日 水／ 午、北村、たみの、唐助の卒業の金の事につき来てくれた。その時、軍人謀反の噂を傳ふ。」（16頁）

「二月二十八日 金／ 午後、散髪に行つた。夕、今村來。軍人の反亂今日に至りてなほ静まらぬらしい。

二月二十九日 土／ 午後、久吉肺炎にて重態の電報來。すぐに行かうと思つても戒嚴令により交通停止で自動車がなくてぢりぢりした。やつと乗つて行つた。出<sup>14</sup>を訪ふ。夕方歸つて出なほして小林博士をたのみ一緒に往診して貰つた。歸つてねたら一時半。反亂鎮定せり。」（16頁）とあるだけである。

「長女多美野の勘当」との見出しで始まる

「久吉の葬儀は、三月十九日に小日向台の本宅で営まれた。小日向の**名刹**、**曹洞宗金剛寺住職**で、昭和三年に法政大学を卒業した剛山正俊が導師を務めた。」（山本 [2021.06] 360頁）に注目したい。「久吉」とは、百間の長男とのこと、日記読みの達人であられる山本氏は、「たみのが去年洗礼を受けてゐる事を初めて聞き、許さず」との3月19日の記事を見逃さず、その辺りの物語を上手に紡いでいるのだが、その日記からの情報では知れないことまでもしっかりと物語っているので、わたしは、それを問題にしようとしているのである。山本氏は、次のように書いている。

<sup>13</sup> この「内田百間伝」は、内田百間の「没後50年」の記念の年である本年（2021年）に刊行された。今回偶々読んだ高嶋 [1951.06] 所載の「聖徳太子奉讃會誕生のころ」によって、本年は「聖徳太子」の没後1400年の記念の年であることを知った。

<sup>14</sup> 百間の同郷の友人である有名な哲学者、出隆博士。

「じつは多美野が」と、百間は切り出した。「知らないうちにキリスト教に入っている。わが家は仏教である。断りなくキリスト教に入るなど絶対に許されないので、勘当を言い渡したけど、とりあえず相談相手にでもなってやってくれないか」／「わかりました、話を聞いてみましょう。ところで、どうなさりたいのですか」／「キリスト教など止めて、家の宗教に戻れとってください」(山本 [2021.06] 361 頁)

百間の教え子／弟子の内山保の実弟、内山基<sup>15</sup>への頼みである。他でもない、わたしは、今、百間がこれほどの熱烈な仏教徒であることを示したかっただけなのである。そして、こんな百間の書いた随筆に対して著者への一言の断りもなく、文題を変更した『大法輪』の編集者などのことを問題にしたかっただけなのである。因みに、先ほど引いた「百鬼園漫筆」の「二、心經」の中に、やや不思議な「藪の中の一軒家に住んでゐる山川さんと云ふ瘦せた背の高い老人は、士族の成れの果て」が登場する。これは、わたしは、少なくとも実名ではないだろうと想像しているのである。ならば何なのかと言われそうだが、その存在そのものがフィクションとは言わないまでも、その名前は、その原稿依頼に直接的に関わった『大法輪』の記者の名前を拝借したのではないか、ということである<sup>16</sup>。先に引いた日記中の「九月二十七日」原稿を取りに来た「大法輪山下」である。山下ならぬ山川である。学生時代に誰もが読んだ瀬田貞二訳の『指輪物語』1(旅の仲間上)、忍び旅の一行を率いたフロドが「踊る小馬亭」で使った偽名が確か「山の下」(291 頁)だった。バラントインのペーパーバックだとフロドは“My name is Underhill.”(p.210)と名乗ったのである。百間先生にとって、その手のイタズラはお手の物であった。

さて、百間が眼にした大洞良雲の「般若心經講話」の連載であるが、その第11号で完結したことが、同誌の「編輯後記」の「一世の名講話、大洞良雲老師の般若心經講話は本號を以て惜しくも完結を告げました。」から知れる。そして程なく単行本にまとめられ、われわれの知る『般若心經講話』、大洞 [1938.10] となったのであろう。この手の「般若心經講話」の類いは、無数と言えるほどに多数ある。そしてわたし自身もこれまで

<sup>15</sup> 百間の長女多美野と内山基は後に結婚することになるらしい。

<sup>16</sup> 四十年も前の必ずしも直接自分に深く関わりを持つ者ではない人物を自分の随筆の中でややネガティブな調子で扱う場合、果たして実名(個人情報?)で登場させるものだろうか。

いくつも手に取った。が、いつも煙に巻かれているようで、一つとして感心したものはないのである。『大法輪』の創刊號にも、中野松堂による「般若心經」が掲載されている（273-291頁）。初頁のタイトル「般若心經」に冠して「六つかしいお經もこれなら判る」とあり、最初の「佛教はやさしいものか」との見出しに続いて、以下のように書き出されている。

「これから『般若心經』を、極く平易に、どなたにもわかるやうに説いて見たいと思ひます。けれどもごくやさしくと云うても、そのやさしくは説き方をやさしく説くのでありまして、『般若心經』の内容そのものは、決してやさしいものではないのであります。／ 全體「佛教」といふものは、決してやさしいものではない。それは何處までもむづかしいもの。しかしそのむづかしい佛教を出来る限りやさしく説く、それが肝腎なのであります。然るに今日までは兎角、このむづかしい佛教を更にむづかしい言葉でむづかしく説いて來て居りましたので、爲めに普通の人にはてんで齒が立たぬ。」（273-274頁）

「百鬼園漫筆」の「三、大般若」は、窺うに、百間の幼少の頃の「大般若転読」の思い出を内容とする。わたしの幼少時代の仏教生活の中には、やはり縁のない行事である。今の職場に來てからご縁があつて何度か遭遇したことがあるだけだが、以下の百間の描写はさすがである。

「時時、お經の折本を持つてゐる片手を高く差し上げて、お經を手風琴を伸ばした様に引張つておいて、上の方の手許にたまつてゐる折り目を離すから、お經が一時に何十頁も、ひらひらと下の手許に降つて來る。いい加減落としたところで止めて、止めた所をひろげて又むにやむにやと讀み出す。そんな事を何度かすると、それでもうその本は一冊みんなすんだ事にして、閉ぢて額の前に戴き、又新しい本を讀み始める。だから『大般若ですませておく』と云ふのであらう。折り本をひらひらと翻す時に起こる風に吹かれると、お蔭を受けて災難を免れると云ふので、私もその座に呼ばれたのである。祖母は初めからその真中に坐つて、方方から起こる風を一身に受けてゐたのだらうと思ふ。」（63-64頁）

仏教にとって、あの「大般若転読」なるものはいったい何のためのものなのか、という疑問に秘かにいつも悩まされていたわたしとしては、下線を付した箇所が指示する「風に吹かれる」「風を一身に受け」という説明は、ある意味、驚きであり、およそ思いもかけなかった新鮮至極なものであつ

た。その「三、大般若」の後半は、東京の百間宅に訪問した「親戚の老牧師」による、偶々その「大般若の當日」に居合わせた、その夜の「晩ご飯」時の「酒と佛教&耶蘇教」をめぐる思い出話に嗣がれ、さらに酒を飲めない「旦那寺のお住持」／和尚が、「コップのサイダーを一口二口飲んで」酔ったという話に展開し、最後は、以下の一節で結ばれているのである。

「私が祖母に連れられてお十夜に行くと、最後の晩には、その和尚さんがお香の煙でいぶしたお手判を私の額に捺してくれた。それを子供の時何年も繰り返してゐるので、私が死ねばその判の痕がありありと額に浮かぶ事になつてゐる。人間の目には見えなくても、佛様には解るに違ひないのである。」(65頁)

この「お十夜」と呼ばれるものも、恥ずかしながらわたしには馴染みのないものである。〈子供の健康祈願〉などを目的としたものと想像されるが、その真義も不明である。が、百間が、岡山の〈裕福な造り酒屋の息子〉として幼年期を過ごしたことに纏わる「仏教」というものであろう。仏教というものに対して百間の冷徹な視線を感じるとともに、そうした仏教の中を一身に生きた百間の生々しい体験に裏打ちされた清々しい口吻に打たれるのではないか。

### 『大法輪』から「近代日本の仏教」へ

さて、『大法輪』の創刊號は昭和9年10月1日に刊行された。その時代とはいったいどういう時代だったのだろうか？ 昭和9年は1934年である。第一次世界大戦は1914年、あの関東大震災は大正12年、1923年である。わたし自身は、「近代日本の仏教」というものに端から関心を抱いてきた。仏教の門外漢ながら、サンスクリット語で書かれたインド古典籍の乏しい読書経験を頼りに、テーマを細かく限定することによって、これまでも一度ならず、その「近代日本の仏教」とそれに関わったあれこれの人物の生き様のようなものについて、何とか考証を重ねてきたのである。『大法輪』誌の歴史を紐解くことによってでさえ、さらに某かの新たな知見を提供し得るかも知れないと考えたのが、本論攷の発端であった。あれこれ何かを忖度するようにして「坊主」を「坊さん」に変更するような編集者を抱える仏教誌、『大法輪』は、いったい何を目的として創刊されたのだったか。幸いその創刊號は手許にあるので、まずはそこに懸けてみたい。創刊の辞は以下の通りである。

「創刊の辭／時は正に非常時、國運進展せんとして、東亞の新黎明に、警鐘が鳴る。思想問題に、國防問題に、農村問題に、生活問題に、その徹底せる解決を求めんとするの聲は喧々囂々として耳を聳するばかりである。而も國民は、今尙統一ある歸趨を見出し得ない。そは何故か、眞の信念なき爲である。此時に當りて、佛降誕二千五百年を迎ふ。大聖釋尊の教法、そはこの無明の長夜を彷徨する大衆に與へられたる唯一の大燈炬ではないか。茲に於て、『大法輪』は正法を大衆に傳ふべき使命を以て、創刊せられたのである。」(17頁)

いかが。この「創刊の辭」は無署名であるが、それに続いて、それをさらに詳説せんとしてか、やはり無署名の「不滅の法輪」が、四頁に亘って掲載されている。内容を的確に要約したかの見出しが、「佛教と力強き生活」「體驗の宗教」「佛教を直ちに大衆に」「學問と信仰」「宗教と文藝」「新日本の建設と宗教」「青年佛教徒の奮起を望む」である。その最後の「青年佛教徒の奮起を望む」の本文は以下の通りである。

「既成佛教教團が、腐敗墮落のドン底に陥つてゐることは、識者の等しく認めるところである。病膏肓に入つてゐる彼等には、最早手の下しやうもないが、吾人はせめても純眞なる青年佛教徒に既成教團の汚れた空氣に染まず、團結して眞正なる佛教復興に精進されんことを希望する。かくして更に進んでは、その復興せる佛教を以て社會の各方面を淨化し、本當の佛教日本を創造して、來るべき非常時を打破し、以て皇國日本の眞價を、一層輝かすに至らんことを、心より希うて止まない。」(21頁)

そして、輝かしい『大法輪』誌創刊號の目次である。上記「不滅の法輪」に続いて創刊號の巻頭を飾る加藤咄堂<sup>17</sup>の「禪風心涼を送る」を初めとして、雑誌の要所に配置された白抜き文字の掲載記事に注目し、白抜きではないものの、明らかに他と區別する意図を以て両側線の付された高楠順次郎のそれを併せて、以下に並べてみよう。

<sup>17</sup> ずっと以前、加藤咄堂の墓を偶然訪れることになった。学生時代にご指導いただいた高崎直道先生が亡くなられたのは2013年5月4日である。赤羽の御方坊で行われた通夜には駆けつけたが、それから半年ほどしての秋晴れの日、ふと思ひ立ってその静勝寺（曹洞宗）に墓参りに出かけたのである。先生のお墓を探して人気のない墓地をしばし彷徨ったが、「静勝寺九世雪峯直道大和尚」と刻まれた高崎家之墓とほとんど背中合わせのようにしてある「淨名院大智咄堂居士」と刻まれた加藤家之墓を見出して驚いたものである。あれからももう八年が経ったのだ。

禪風心涼を送る	加藤咄堂 (細木原青起画 <sup>18</sup> )	22頁 <sup>19</sup>
大乘佛教の精神	高楠順次郎	168
現代思潮と大乘起信論	高島米峰	110
女人問法:岩井大僧正に聴く	臨時記者栗島すみ子 <sup>20</sup> (小野佐世男画)	120
碧巖録の提唱	修善寺主丘球学 (石川寒巖画)	338
連載戯曲聖徳太子五幕	邦枝完二 (吉村忠夫画)	366

いかが。わたしが本論攷の「近代日本の仏教」で臚に中心的にイメージしていたのは、太字にした、加藤咄堂、高楠順次郎、高嶋米峰の三名である。創刊號の「編輯後期」で真っ先に言及されているのは、以下の通り、高嶋米峰である。

「高嶋米峰氏の「現代思潮と大乘起信論」は悪臭紛々たる現代への警笛であり、他名士の論文も一つとして我々の血となり肉とならざるものはないと信ずる。」(384頁)

「編輯後期」の執筆者の署名はないものの、奥付に「編輯兼発行人 石原俊明」とあるので、石原俊明と考えるべきであろう。これまで加藤咄堂、高楠順次郎については一度ならず言及したことがあるが、確か、高嶋米峰については初めてかと思う。文献そのものは、既にたくさん集めてある高嶋米峰であるが、それと言うのも、わたしにとっては、高嶋米峰はやはり同郷人と呼ばざるを得ない人物であるということが関係している。既に何度も口にしてはいる通り、わたしは高田市(現上越市)を故郷とするものだが、高嶋米峰も言ってみればほとんど同郷の人である。わたしは上越市を貫流する荒川／関川の近傍で生まれ育ったが、その一級河川にかかる橋を

<sup>18</sup> 『大法輪』という雑誌は「挿絵」を一つの売りにしているようである。「編輯後記」に「△それから本誌の挿絵を見て頂き度い。なんと充実してゐることだらう・・・」(384頁)を読むまでもなく、随所に美術誌や美術展などの広告が掲載されている。そのわけは、『大法輪』創刊號に、異例?とも思われる「文部省宗教局長」の肩書きを冠した菊澤季磨氏の「大法輪の行く可き道」という記事の冒頭の「國際情報社は月刊「國際寫真情報」を刊行して多年東洋文化の闡揚、特に日本藝術の海外紹介に盡瘁しその業績の見るべきもの鮮少ではない。今や機縁熟して更に雑誌「大法輪」を創刊し、佛教思想の普及振興に邁進せんとせらるるは洵に慶賀に堪へざる所である。」(77頁)を読み、本論攷末尾に掲載する『大法輪』関連の参考資料を読めばわかるはずである。

<sup>19</sup> 『大法輪』誌の目次は、頁順に並んでいるわけではないことに注意する必要がある。

<sup>20</sup> 映画ファンなら承知のはずだが、この女性は「日本映画界初期の人気女優」である。



渡って城址部にある中学や高校へ通ったのである。晴れた日、橋を渡る時、前方には居並ぶ越後（頸城）の名峰を仰ぎ見ることになる。一番手前には颯やかな稜線を持つ南葉山、その左に焼山、火打山という高峰を背後に幾つかの外輪山を持って美しく聳える妙高山は常に変わることなく峨峨としている。その左手の、隣県の黒姫山などはやはりものの数ではない。が、「ああ、東京はあの山の彼方にある」といつも秘かに思ったものである。学校から帰る時は逆にそれらを背に、「川向こうの」わが家を目指して橋を渡るのであるが、その左手の遠くに聳える美しい孤山が、三階節の「米山さんから雲が出た」の米山である。荒川の流れ行く先は佐渡島をも見晴らす日本海である。高嶋米峰の米峰は、言うまでもなく、その米山に因んだものであろう。生地はその麓に連なる「吉川町（よしかわまち）」高嶋米峰は浄土真宗のお寺の子として生まれたとあり、通常の学校教育は地元では受けなかったようである。おそらく、石原俊明が、仏教専門誌の『大法輪』誌を創刊するに当たって、相談に赴いた識者たちの一人に、当時の日本仏教界の顔役の一人<sup>21</sup>、高嶋米峰がいたのだと、その編輯後期の書きぶりなどから、わたしは勝手に想像しているのである。

時は昭和9年。近代日本も明治から大正を経過して、昭和に突入したところである。『現代佛教』誌（現代佛教社）の豪華な十周年記念特輯號《明治佛教の研究・回顧》が刊行されたのが昭和8年の7月のことである。編者は、百間同様、夏目漱石門下にしてその女婿の松岡讓<sup>22</sup>。匆々たる仏教学

<sup>21</sup> 高嶋米峰の顔役ぶりは、自らの交友関係を赤裸々に綴ったような高嶋 [1951.06] を覗いただけでも直ちに看取できる。その豪華な顔ぶれは、学界、宗教界、芸術界、経済界、政界といった広範多岐にまたがるものと言える。同書には「朝日賞と高楠順次郎博士」(238頁)、「教へて求めざるの土加藤咄堂君」(246頁)、「加藤咄堂居士の一面」(248頁)も収録されている。

<sup>22</sup> 同誌の編集人である松岡讓の編輯後記に相当する長めの「僕と雑誌」(778-780頁)の書き出し部分を引いておこう。「漸くの思ひで、長い事力瘤を入れて揉みに揉んだ特輯號の編輯を終つた。手不足のところへもつて来て、これは又思ひ切つた平常の六倍以上もある大がりの雑誌をこさへたのだから、編輯部のでんでこ舞ひたるや蓋し言語同断、こんな事でいつ本當に雑誌が出来るのかさへ一時は全く危んだ位であつたが、ともかく一ト月半許りおくれた程度で目鼻のついた事は、よくまあこゝまでこぎつけたものだといふ氣が、特に私にはするのである。こゝに厚く御執筆の諸先生に感謝する。・・・」(778頁) いつも一方では編輯後記のことばかり考えているわたしとしては、本當言うと全文引用したいところだが、ここで留める。太字にした「言語同断」の用例を一つ提供したいという思いもあった。

者たちが居並ぶ中で、その中心になっているのが、言うまでもなく高楠順次郎である。その圧倒的な目次は、活字の大小と太字細字の違いで変化がつけられている。七名の執筆者とその論文名だけは太字で印刷されていて、一瞥やはり目立つのである。巻頭論文たる「明治佛教の体勢」の高楠順次郎(6頁)、「明治時代の神儒佛基の交渉」の井上哲次郎(58頁)、「明治佛教に影響を興へた西洋の佛教學者」の高楠順次郎(152頁)、「明治の帝都佛教復興の追憶」の北野元峰(431頁)、「追憶雑談」の境野黄洋(521頁)、「明治佛教の経験と體驗」の谷本富(532頁)、「予が見たる明治の日蓮教團」の田中智學(539頁)である。むろん「明治時代の在家佛教」を寄稿している加藤咄堂は二回目の高楠の右隣二番目にいるし、その高楠の左隣には泉芳璟が、その隣には長井眞琴がいる。当然ながら、われらが忽滑谷快天もいれば河口慧海もいるのだが、あれれ、「高島米峯<sup>23</sup>」はと思うと小さい活字ではあるが、しっかりと「井上圓了先生を憶ふ」(710頁)を書いている。そう、高嶋を考える際には、同県人でもある「井上圓了」との関係は抜きには出来ないのである。高嶋の没後五十年を記念して刊行された『高嶋米峰』の巻頭に掲載されている「哲学館得業証明書」の写真や丙午出版社&鶏聲堂書店の看板を掲げている「東洋大学門脇にあった高嶋米峰の住居・店舗」の写真などが印象的である。

フィクサーとしては高嶋米峰であろうが、巻頭論文を得意の雄弁を駆使して華麗に展開しているのが加藤咄堂である。加藤咄堂に関してもわたしは文献資料を既に山ほど蒐集しているのだが、残念ながら、それを活用して論を構成する余裕が未だ持てないのである。ここでは、問題の『大法輪』の創刊號の巻頭を飾っている「禪風心涼を送る」についてだけ簡単に見ておくことにする。「暑苦るしい世の中」との見出しと共に、加藤咄堂の『大法輪』創刊號の巻頭論文は、次のように始まっている。

「禪風、心涼を送る。現代は暑苦るしい世の中だ。何もそれは昨今の暑さをいふのではない。時代其者が暑苦るしい。閑静な農村を去つて雑踏な都會へと集中する近代文明。風も通さぬ鐵筋コンクリートの林立。ジャズの

<sup>23</sup> 目次では「高島米峯」と表記されているが、本文では「高嶋米峰」表記である。「峯」と「峰」は、明らかに字形は異なるが、別字とは考えられていないようである。スペースに余裕のない時に「峰」に代わって「峯」の字が便宜的に使われることが今回判明した。なお高嶋米峰の名前に冠しては、かなり込み入った複雑な事情があるので、本論致ではこれ以上触れない。

音騒がしき所に、自動車の爆音、電車の響き、汽笛の聲。何處に涼しい所があらう。」(22頁)

「世界の風雲は所謂暗雲低迷、いつ低氣壓が来るかもしれぬ鬱陶しさ。イツソ雷雨でも襲来すれば、涼風何れの處よりか吹き来るかも知れぬが、そこまでには至らずして非常時—の呼聲高く、鳴物入りの大わめき、イヤ暑いこと—。誰か此間に涼風を送るものがなからうか。」(23頁)

そして、「涼風何れより来る」との見出しに続いて、次のようにある。「此の暑苦しき、近代的景況に、一陣の涼風を送り来るものは禪である。禪は東洋思想の結晶、その出發に於て近代思想と相反する。」(25頁)

「自己の本心」との見出しの下で次のようにある。「外に向つて馳驅する現代人の心を内に向はしむるだけでも、禪風は心涼を送る。況んや其の内に向ふ心の源底には、自己本來の面目の佛と相異らざるものあるをやで、これに對面せんとする所に靜坐の工夫はある。」(30頁)

「外からの粉飾たる綺羅輕裘を誇り、人によつて輿へらるゝ權勢利得に齷齪して、ヤレ外聞が何の、人前がどうのと物質的慾望に驅られ、金さへあれば何でも出来る。一金、二金、三亦金、といふが、金では買はれぬ心の楽しみ、これを全く閉却して居るから金殿玉樓の中に憂愁あり、翠帳紅閨、煩悶を免れず、それが産み出す家庭悲劇。／『元日は何はなくとも親二人』の快樂を味ふことが出来ず。あるが上にも多きを求むる金錢慾は『灰吹と金持とは溜るほどきたなく』なつて、金錢といふ重荷を身に負うて暑苦しいこと此上もない。古徳は『學道は須らく貧を學ぶべし』と。」(32頁)

そして、最後の「一菊の涼味」との見出しで『寒暑到来、如何か回避せん』と問われた洞山大師は、

「『寒い時には汝を寒殺し、熱い時には汝を熱殺せよ』／と云はれた。これは有名なる禪宗の公案で説明の限りでないから公案一つにでも心を集注して見よ。寒暑に苦しむ心は全く忘れられて心頭一菊の涼味、油然而して湧き出るものがあらう。」(39頁)

そして、その卷頭論文の最後を加藤咄堂は以下のように結んでいる。「禪風、心涼を送るといひながら、僅かに一菊の涼味だに送る能はざりし、漫然たる此の雜文を終るに當り、此海舟先生が座右の銘を擧げて、これを處世の箴として、我が心の智火情熱を拂ふことにしよう。銘に曰く、／『自ら處する、超然たり、人に處する、靄然たり、事無ければ、澄然たり、事

あれば、軒然たり、意を得れば、淡然たり、意を失へば、泰然たり』……  
<略>……これ禪心であり、這機であり、禪用であり、又實に禪風の送り来る心涼である。」(39頁)

いかが。「暑苦しい時には、禪の風が、心を涼しくしてくれる。」と説いている論文であろう。禪の風は大きく分けて二つ考えられる。一つは坐禅をすること、一つは公案に熱中すること。どちらも外に目を向けがちな現代人に内こそを見ることを奨励することになる。その結果、当然のことながら「お金」と縁がなくなり、「貧する」ことは必然である。換言すれば、暑苦しい時には、「須く貧を學ぶべし」ということであろう。高嶋米峰によれば、『我が加藤咄堂居士は、依然として貧乏である。』とかう言つたら、あの大家がと、驚く人もあらうし、又あんな大家に對して、失禮だと、怒る人があるかも知れない。がしかし、事實は事實だ、いくら友人でも、誤魔化す譯にはゆかない。／ その貧乏たるや、今に始まつた貧乏でない。と言つても、生れながらの貧乏といふのではない。」(高嶋 [1939.12] 248頁)とか。昭和9年に創刊された仏教専門誌の巻頭言が、暑さ対策には貧乏が一番と読めるのである。その模範的な貧乏生活者が、坊主(いや坊さん)ということなのではないか。「神主は汗をかくけれども、坊主は汗をかかない」という内田百間の「百鬼園漫筆」の「一、坊主の汗」と見事に呼応するようにわたしは思ったのである。そう言えば、百間のもう一つの有名な別号の「百鬼園」の謂われは、確か「借金 (= 貧乏)」というものであった。加藤咄堂も内田百間も、どちらも僧侶ではなさそうである。その二人が、共に、一方は禪風を高く評価し、一方は「汗をかかない坊主」を高く評価したのである。わたしにも、今後「近代日本の仏教」について二度も三度も考究する機会が恵まれるに違いない。本論攷は、その来たるべき日のためのいわば助走に過ぎないのであるが、なにかその際の有力な視点を手にし得たようなのは望外の喜びである。

### むすびにかえて

わたしは、「百鬼園漫筆」を通じて、仏教の専門家などではない内田百間の仏教観を窺ってみようなどと漫然と考えていたのであるが、思いがけず、百間のその名文家ぶりを改めて確認することが出来たようで洵に嬉しく思っている。百間は、仏教を高く評価していたのであろう。「暑さ」が苦手で、その「暑さ」に対する涼風をもたらすものとして仏教をはっきり

と位置づけていたと言えるのではないか。「一、坊主の汗」では、「神主は汗をかくが坊主は汗をかかない」と明確に主張し、「二、心經」では、『般若心經』という仏教の経典を好ましいものとして黒住教の祈祷などとは対比的に懐かしく回顧している。そして「三、大般若」では、大般若六百巻の転読の意義を、それが引き起こす「風」にあると明確に意識していた。当然ながら、その風は熱風などではなく、暑さを吹き飛ばす涼風であったことだろう。そして、その後で、偶然法事に立ち会うことになった「牧師」と「和尚」の挙動をかなりシニカルに描いているのである。牧師とはキリスト教の担い手である。「和尚」とは必ずしも「貧しい」坊主のことではない。こうして見てみると、『大法輪』に寄稿した「百鬼園漫筆」三題噺は、いずれも、一見、仏教に対する奇矯な物語のようにとれなくもないが、実のところは、さにあらず。その「百鬼園漫筆」に対するいわば貴重な自註 (sva-vṛtti) と見なし得る、本論攷の初めに引いた『百鬼園夜話』中の「坊主」という随筆の意義深い一節をもう一度思い起こしてみるべきであろう。わたしが改めて注目すべきと考えたのは、「夏の暑い盛りでも神主は汗をかくけれど坊主は汗をかかないと云ふ様な事を書いた。その雑誌におもねつつつもりはないが、自分の思ふ所を述べて坊主の肩を持つたのである。」というくだりである。にもかかわらず、百聞自身は、編集者である当の「お坊さん達」が、自分の随筆の真意を正しく解して同感の喝采を送ってくれるどころか、ピント外れの文題変更<sup>24</sup>を平気でやらかして、逆に頼りになるはずの応援団に見事に一泡吹かせてくれたと秘かに深く嘆いたのではなかったか。(了)

### 【略号・参考文献】

『大法輪』 (大法輪閣 1934.10 ~ 2020.07)

安藤峰丸

[1916.01] : 編『曹洞宗名鑑』 壬子出版社

<sup>24</sup> 校正段階で、大法輪閣編集部 [1994.12] を入手した。目次の「随筆」の括りには、内田百聞の「百鬼園漫筆」もあり、新字旧仮名遣いで再録された「一、坊さんの汗」を改めて読み、文題変更だけでなく、本文中に六箇所あった「坊主」のうちの五箇所までもが、「坊さん」に変更されていたことに気づいて、さらに愕然とした。

(20) 「近代日本の仏教」への助走—『大法輪』奇聞— (金沢)

内田百閒 (1889 ~ 1971)

[1936.11]: 「百鬼園漫筆」『大法輪』第三卷第十一號

[1971.12]: 著『内田百閒全集 第二卷』講談社

[1972.06]: 著『内田百閒全集 第五卷』講談社

[1982.01]: 著『隨筆新雨』旺文社文庫

[1987.06]: 著『新輯内田百閒全集第六卷』福武書院

[2019.05]: 著『百鬼園戦前・戦中日記』(上)(下)慶應義塾大学出版会

大洞良雲 (1874 ~ ?)

[1936.09]: 「般若心經講話 第七講」『大法輪』第三卷第九號

[1938.10]: 著『般若心經講話』大法輪閣

[1942/1948.09]: 著『修證義講話』大法輪閣

金沢篤

[2012.12]: 「忽滑谷快天ノート(1) —欧米巡錫の実情—」『駒澤大学禪研究所年報』第24号

[2013.12]: 「忽滑谷快天ノート(2) —仏骨奉迎の顛末—」『駒澤大学禪研究所年報』第25号

[2018.03]: 「漱石と快天」『禪叢』(駒澤大学禪友会誌)第15号

[2019.12]: 「忽滑谷快天ノート(4) —夏期講習会と明治期の仏教事情—」『駒澤大学禪研究所年報』第31号

大日本雄辨會

[1927.03]: 編『高島米峰氏大演説集』大日本雄辨會

[1927.04]: 編『加藤咄堂氏大講演集』大日本雄辨會

大法輪閣編集部

[1994.12]: 編『『大法輪』まんだら—創刊60年秀作選』大法輪閣

高嶋(高島\*)米峰(1875 ~ 1949)

[1927.08]: 著『隨筆 思ふまゝ\*』大日本雄辨會・講談社

[1939.12]: 著『隨筆 人\*』大東出版社

[1950.11]: 著『高嶋米峰自叙傳』學風書院

[1951.06]: 著『高嶋米峰回顧談』學風書院

[1993.09]: 著『高嶋米峰自叙伝・米峰回顧談—統高嶋米峰自叙伝—』  
<伝記叢書132>大空社

高嶋米峰没後五〇年記念顕彰書籍刊行会

[2000.08]: 編『高嶋米峰』ピーマンハウス



友松圓諦

[1956.03]：著『般若心經講話』＜現代聖典講話2＞河出書房

松岡讓

[1933.07]：編『現代佛教 明治佛教の研究・回顧／十周年記念特輯號』

現代佛教社

山本一生

[2021.06]：著『百問、まだ死なざるや—内田百問伝』中央公論新社

【『大法輪』関連参考資料：ウィキペディアに拠る】

\* 石原俊明

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%B3%E5%8E%9F%E4%BF%8A%E6%98%8E>

「石原 俊明（いしはら しゅんめい、1888年1月21日-1973年1月17日）は、静岡県出身の昭和期の実業家、出版者、曹洞宗の僧侶。化学工業新聞社、国際情報社、国光印刷、大法輪閣の創業者。」

「静岡県小笠郡大須賀町（現、掛川市）に生まれる。1891年、浜岡町新野（現、御前崎市）の想慈院に引き取られる。この頃、可睡斎で日置黙仙禪師に師事。1903年上京。化学工業新聞社社長に就任。科学知識普及協会を設立。1921年、『科学知識』創刊。1922年有限会社国際情報社を設立、『国際写真情報』創刊。1923年『劇と映画』創刊。1924年『国際写真グラフ』『婦人グラフ』創刊。1934年9月『大法輪』創刊。

戦後1951年株式会社国際情報社復興。1959年『家庭全科』創刊。1966年有限会社大法輪閣設立。1969年大法輪石原育英会設立。1973年1月17日、心不全により逝去。」

\* 国際情報社

[//ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E6%83%85%E5%A0%B1%E7%A4%BE](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E6%83%85%E5%A0%B1%E7%A4%BE)

「国際情報社（こくさいじょうほうしゃ）は、1922年から2002年まで存在した日本の出版社。化学工業新聞社社長の石原俊明によって設立され、『国際写真情報』『映画情報』『婦人グラフ』『家庭全科』『大法輪』などを発行していた。」

「1922年、京橋区山下町に有限会社として設立、『国際写真情報』創刊

1923年、関東大震災で社屋が焼失

(22) 「近代日本の仏教」への助走—『大法輪』奇聞— (金沢)

1945年、空襲で社屋を焼失

1951年、渋谷区恵比寿に株式会社として復興

1966年、子会社として有限会社大法輪閣を設立

1969年、大法輪石原育英会を設立

2002年6月、会社清算

\* 大法輪閣 (有限会社)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%B3%95%E8%BC%AA%E9%96%A3>

「有限会社大法輪閣 (だいほうりんかく) は、日本の仏教書の出版社。月刊誌『大法輪』の刊行のほか、仏像、仏具、CDなども販売している。曹洞宗・浄土真宗・真言宗関係の書籍が多い。」

「1966年 国際情報社より独立。1934年創刊の『大法輪』の編集を引き継ぐ。

1969年 財団法人大法輪石原育英会を設立。

1989年 仏教美術品の販売を開始。

2015年 大蔵出版を関連会社化。

2020年 中山書房仏書林を吸収。

2020年6月8日に発売する『大法輪』2020年7月号をもって休刊することを発表。

2020年11月、恵比寿南に移転。」

### 【旧資料紹介1】

「明治の佛教と大正の佛教」(加藤咄堂)大日本雄辨會[1927.04]所収(214-217頁)

「(大正十五年秋東京帝大佛教青年會館に於て、手稿)

歴史をたどつて佛教の盛衰をいへば、奈良朝は三論、法相、華嚴、俱舍、成實、律の六宗が行はれたが、平安朝に入つて天台、眞言の二宗蘭菊の美を競ひ、鎌倉時代には禪と浄土との二門に日蓮を加へて、奈良平安の公卿的であつたのに對して武士的であり、官僚的なるに對して民衆的となり、中世の戰國時代を経て徳川時代に入り、例の宗判精度のために全く國教の如き状態を以て日本國民全體を何宗何寺かの檀中たらしめ、傳統的に之を持續して桃花夢濃かに三百年の太平を保つた。

此鎖國の夢を破り、明治維新の大業を成就するに當つて、佛教徒はあま

りに参加しなかつた。勿論二三の勤王僧のなかつたではないが、全體の勢ひをつくつたのは儒教の大義名分の思想と國學者の王政復古の思想、それに加へて蘭學者の世界的眼光であつた。それがために明治の初めに最も迫害を蒙つたものは佛教であつたのである。神佛は分離せられ、皇族方は還俗せしめられ、或る地方では廢佛毀釋さへも行はれたのである。

幸に全く排毀せられなかつたとはいへ、教部省が三條の教則を出し、其の劈頭に「敬神愛國の旨を體すべきこと」を振りかざして神佛各宗の教師をして之れが宣傳に従事せしめたるは決して佛教の榮譽ではなかつた。されど、こは長く續かずして歐米に漲れる正教分離の近代思想は我が國の爲政者をも動かして、明治八年四月を以て「神佛合併布教差止められ」て、教則の羈絆を離れ自由に布教するを得るに至つたが、こゝに新來の競争者の滔々たる勢ひを以て入り來るに遇ひ、一難去つて又一難來るの感なきを得ざるの苦境に陥らざるを得なくなつた。

新來の競争者とは云ふまでもなく、西洋文明を背景とする基督教である。若し此時に基督教のみが來つたのであつたらば佛教の苦境は一段と甚だしかつたであらうが、西洋より來れるものは基督教のみではなかつた。これと衝突し軋轢し、しかも近代文明の中堅となれる科學哲學があつた。此科學哲學の援助をかりて自教の優秀を示さんとしたものが佛教の先業であつた。故に明治の佛教は哲學的に研究せられ、哲學的に宣傳せられたのである。

併し宗教は哲學ではない、理智の判斷のみによつて人間生命の全要求を満足せしむべきものではない。此に於て科學哲學を超越する禪の流行となり、淨土門の鼓吹となり、日蓮主義の宣傳となり、親鸞上人の研究となり、密教の隆盛となつて、理智以上の境地を説き、純眞なる熱情や、人間本然の要求に基き、理智より信仰へ、哲學より藝術へと向ひ來つたのが近代の傾向で、大正の佛教は此藝術の方向に新生命を開かんとする。これが明治佛教と大正佛教との最も著しい異點である。

明治佛教は哲學に生き、大正の佛教は藝術に生きんとする。

明治佛教は理智の佛教であつた。大正の佛教は信仰の佛教たらんとする。

明治の佛教は認識の佛教であつた。大正の佛教は生命の佛教たるを要す。

明治の佛教は論の佛教であつた。大正の佛教は經の佛教であらねばならぬ。

論は教理の説明であり、經は佛陀直接の教示である。經の中には甚深なる哲學を藏すべきも、大乘に入つては頗る藝術味の横溢するを見る。構想

の雄大にして譬喩の巧妙なる、不世出の文藝家にあらざれば、これを今に傳ふことは出来ない。而して大正の世はこれを要求し来る。

今一つ明治佛教と大正佛教との異なる所は、明治の佛教は教則宣傳の初めより對基督教の運動に至るまで、すべて國家的であつた。併し大正佛教徒の活動は社會的であり、又民衆的である。全國社會事業の三分の二は實に佛教徒の經營又は参加になり、社會的に生き民衆的に働かんとする傾向は、歴々指摘し得るに至つた。エルワードは其の社會的見地に於ける宗教改造に於て基督教の歐米社會に其の權勢を失墜せる原因を以て科學と民衆主義に適應しなかつたがためであるといつた、今佛教は此の二つに適應しつつ、更に人類生命の表現たる藝術の上に生きんとして居る。

佛教哲學は既に現れた、來るべきものは大なる佛教藝術であらねばならぬ。佛教と國家との關係は既に過去の歴史である。佛教の社會的使命は今漸く現れた。次ぎに來るものは佛教の世界的人類的な光明であらねばならぬ。佛教徒果して此自覺ありや。時は進む、人は依然として昔の人であつてはならぬ。(約四十分)」(214-217頁)

### 【旧資料紹介2】

「書齋の佛教、街頭の佛教」(高島米峰) 高嶋 [1927.08] 所収 (26-27頁)

「佛教も、一個の哲學として、學者書齋の拈弄に委ぬるを以て足れりとするべくむば、如何にそれが、高遠幽玄にして、凡俗の思議を許さざるものにてもありぬべし。苟も、宗教として、一切衆生を濟度せむとする職能を全うせむがためには、その説くところ、極めて平易明快ならずむば、全くその用をなさざるを知らざるべからず。書齋の佛教と街頭の佛教との相違、實に茲に在りて存す。

始めて佛教を求むるもの、賣談僧の説教の甚だ卑俗低調なるに失望して、去つて佛教學者を訪ふ。これは又、難解の術語を濫出しての博學多識振り、滔々辨じ去り説き來れども、聽くもの聲の如く唾の如く、而して曰く、『佛教なんてものは、畢竟くだらないものでなければ、わからないものだ。』と。斯くの如くにして、一般識者は、佛教を捨て、顧みざるに至る。教の罪にあらざして、人の罪なり。

民衆に對する講演は、縱令、聽者を感激せしむること能はずとするも、少くとも、了解せしめざるべからず。苟もこれを了解せしめむと要す、必ずまづ、その組織、譬喩、用語、態度等に於て極めて用意の周到なるもの

なかるべからず。街頭に立たむとする佛教徒は、法然上人に學ぶところあるべく、日蓮上人に學ぶところあるべし。而して、能ふべくは、應病與藥、隨類應機の活手段を、釋尊に學ぶところなかるべからず。

キリスト教徒は、初めて日本に入り來りし當時より、深くこの點に留意し、その時代々の言葉を以て、文を行り言を立つ、これを以て、これを信ずると信ぜざるとは別問題として、これを了解することに至つては、全く、識者と然らざるとを問はざるなり、佛教徒は、こゝにも學ぶべきものあることを發見せよ。」(26-27 頁)